

川口基督教会の歩みは神様の宣教

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

一昨年、長い歴史を持つ川口基督教会の牧師となって、まず急ぐべきことは、150年の歴史を学ぶことでした。久保淵豊彦主教の力作「川口基督教会百二十年のあゆみ」をはじめとして、「川口基督教会報」、「大阪教区五十年史」、「日本聖公会百年史」、「宣教事始め」などを読み始めました。「150周年の祈り」第2弾を頼まれ、150年を迎える意味や感謝、今後のビジョンと決断を示そうと祈祷文の作成に取り掛かったところ、一つ疑問が浮かびました。それは、川口基督教会の歴史をまとめた、それぞれの節目の際の名称がまちまちであるということでした。

2010年は「創立」140周年、1990年は「創立」120周年、1970年は「宣教」100年、少し遡ると1951年には「創立」80周年でした。150周年記念委員会を立ち上げる際には、かつての「創立・宣教」を巡る意見の対立を踏まえ、あえて「150年」にしたと聞きました。日本聖公会は1859年(安政6)のウイリアムズ師の長崎上陸を起点として、一貫して宣教〇〇年と表記しています。(1959年宣教100周年、2009年宣教150周年)

初めて組織を立ち上げることを創立と言います。川口基督教会の記録を見ると、ウイリアムズ主教は、1870年米国への手紙で「1869年大阪の川口与力町に居を定め宣教活動を始め、大阪の居宅の一部に小さき礼拝堂を拵え(チャペル・オオサカ)、日曜日に英語礼拝を行い候。この礼拝を始めしより以来、拙者は四人の信徒に按手致候(1870年)。是れ大阪に於ける第一回の按手式にして、我が働きの初穂に御座候。」と報告しました。伝道の初穂が得られた1870年を「宣教」の第一歩と定めることが出来ます。聖公会百年史は「この年には西区与力町に講義所を開くことができた。これをもって伝道の端緒を得たのである。この講義所はその英学教授の方面において後の英和学舎となり、その伝道的方面において後の川口基督教会に発達したわが日本聖公会史上最初のもの」(百年史38頁)と、評価しています。しかし、これを「川口基督教会」の創立と言うには無理があります。実際に「川口基督教会」が誕生したのは、1882年に設立された聖提摩太(テモテ)教会と近所の聖慰主教会とが合併した1891年です。

教会は、主イエス・キリストにあって神に生きるすべての人の集まりで、その務めは、礼拝と伝道と奉仕の業を励み行うことです(聖公会祈祷書・教会問答)。これを教会・信仰の用語としては「宣教」と言い、イエス・キリストの大宣教命令に従い、全世界に福音を宣べ伝えることを意味します。川口町に、新しくキリスト教の働きが始まったこと、新しい歴史が創られ始めたことは、神様の御業であり、これに対して関西初で最古の歴史を有することへの誇らしい気持ちを持つことは大変重要なことです。今までの「創立」という言葉には、

そのような気持ちが含まれていたでしょう。

私は今回、150年委員会に**宣教150周年**というタイトルを提案しました。私たちは1870年に始まったこの地での「神様の宣教 (Missio Dei)」に携わってきました。「創立」という言葉は、初めて出来上がった特定の時点に重点が置かれています。しかし、「宣教」は、1870年以來、今まで川口の地で営まれた150年の歴史と働きと、現在、そしてこれからのことをも含む広範な意味を持つ言葉です。

聖書も「太陽の下、新しいものは何ひとつない」(コヘレトの言葉1:9)と教えています。